

松木 明（まつき・あきら）

1、プロフィール

津軽の住民はどこから来たのか、を終生のテーマに据え、血清学、言語学、民俗学などを手段として学際的に研究する。特に、津軽地方のアイヌ語名の研究は津軽のルーツを知る上で極めて重要である。

<生没>

1903(明治 36)年 12 月 14 日 ~ 1981(昭和 56)年 12 月 3 日

<代表作>

『津軽と近代文学』『津軽の文化誌』(正・続)

<青森との関わり>

弘前市に生まれる。昭和9年、帰弘し開業医を続ける。この間、血清人類学的研究から津軽の住民のルーツを研究する。

2、作家解説

1903(明治 36)年 12 月 14 日、弘前市に生まれる。青森県立弘前中学を4年修了し、大正9年、旧制弘前高等学校理科乙類に第一回生として首席入学。13年、東京大学医学部に入学。卒業後大学院に進学し、三田定則教授の下で血清学を専攻し、昭和8年、「人血液の血清科学的研究」によって学位を授与される。昭和9年、帰弘し、34年まで開業する。この間、恩師三田教授の「開業医となっても研究を続けよ」との言葉を守って、津軽地方人の血清人類学的研究(血液型の分布勾配)から津軽地方人の住民のルーツを研究する。津軽地方だけで、人口の16.5%にあたる、約10万人の血液型を調査したという。

松木明は津軽の住民はどこから来たのか、を終生のテーマに据え、血清学、言語学、民俗学などを手段として学際的に研究する。特に、「津軽地方に於けるアイヌ語地名の分布に就いて」などの論考は、津軽のルーツを知る上で極めて重要である。

これらの研究によって、津軽地方人の中にはアイヌ民族の血液が濃厚に残されていることが判明した。この研究を強化補充し、より学際的なものにするため、津軽民俗の会を結成し、津軽方言に関する膨大な研究を行ない、34冊の『弘前語彙』として私家版で刊行する。

45年頃から、津軽地方の医学史や森鷗外の「渋江抽斎」の研究も始める。

津軽を心から愛し、医学、歴史学、民俗学、文学、言語学を駆使した学際的な研究は高く評価され、数学がよくできて、頭が痛くなって熱が上がっても、薬は飲まないで、数学の問題をやっていれば気分がいいと言っていた、と子息の松木明知氏は語る。

32年、東奥賞受賞。40年、青森県文化賞受賞。

1981(昭和56)年12月3日永眠。享年78。

3、資料紹介

○『津軽と近代文学』

図書

1973(昭和48)年11月15日

津軽書房刊。二部構成からなり、第一部は直接津軽と関係のある近代文学作品を扱っている。島崎藤村の「津軽海峡」や田山花袋の「生」「田舎教師」など。第二部は、著者が愛好した文学の読書遍歴を投影したともいべき五つの作品を取り上げている。

○『津軽の文化史』

図書

1983(昭和58)年5月15日

津軽書房刊。松木明知と共著。七章からなり、三章前半までが松木明知の論考、三章後半からが松木明知の論考となっている。各章名が示しているように、津軽に関する言葉、氏姓、ねぶたの起源、医史など、津軽の文化や歴史を広範にわたって詳述している。